

6月



白鳥の飛来地・十勝川

(うるおい十勝川十勝温泉より)



標津川

(釧路河川事務所より)

あの日のあの川 リレー日記 ～第17話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第17話主人公 肥田野美琴

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：北海道十勝川)

「記憶に交じる水」

いつのこと？： 幼少期から高校生まであらゆる過去

どこの川？： 十勝川、標津川、釧路川

「おや」と私は思った。それからまもなく「これはまずいんじゃないか」とも。

四月も終わる、ある日の真夜中。このリレー日記「あの日のあの川」を書く段になって初めて私は気づいてしまった。「あの日のあの川」に書かれるべき思い出は「幼少期や青春時代」のものが奨励されているにもかかわらず、私には過去の記憶があまりないということに。もちろん何か大きな事故にあったというわけではなく、記憶力に乏しいだけである。「ぼんやりと日々過ごしていたツゲが回ってきたか」と今更後悔しても後の祭り。先輩方に「任せてください」と見得を切った手前「いや、実はあまり思い出せなくて」なぞ言えぬ。幸いなことに書式は自由とうかがっているのだし、つたないながら文字で記憶をたどっていこうと思う。

私は北海道の帯広市に生まれ、およそ九歳までこの町に住んでいた。生まれ故郷でありながら思い出が一番少ないのは小学三年生で転校することになったからだろう。

帯広市とは「十勝振興局」の中心地である。この地域で一番有名な川は「十勝川」だ。しかし私はこの川について一般的な話しか知らない。この十勝川で開催される「勝毎花火大会(十勝毎日新聞が主催)」がなかなか大きい花火大会であり、私は幼いころに行ったらしい。親がそう言っていたのだからそうなのだろう。覚えていないことに目を向ければ、十勝川に架かる十勝大橋という音更町に行く途中にある立派な橋を車で通るたびにわくわくしていたことだけなのだ。音更町にはマクドナルドとトイザラスがあって、そこに連れていってもらえるのが幼い私の楽しみだった。それから家のどこかで見た写真の一つに、またまた立派な橋を背景に白

鳥と家族が写っていた写真があったと思う。調べてみると十勝中央大橋の河畔に白鳥が飛来してくるそうだ。おそらくそれだろうと思うが、もちろん小さなときなので記憶がない。

そんな私の記憶に深く根ざしている川は名も知らぬ小さな川である。いや、川と言えるほど大きくもない。水が流れていたと言ったほうが正しいか。

その水は小学校への通学路の暗い森（「若葉の森」と呼ばれていた）のさほど長くない小道に沿って流れていた。音はなかったように思う。小道は短かったが暗い森だった。見上げて空が見えたかどうか。詳しく描写しようにも私は川の始まりも知らず、終わりもわからない。途中でカーブし森を抜ける小道と違って、きっと森の奥に続いていったのだろうと思う。「サンショウウオがいるからきれいに云々」といった看板が立っていたのを覚えている。その森ではエゾリスも時々見ることができた。小学校高学年、そして中学生の背中を見上げながら後をトコトコついて行って森を抜けると小学校と中学校が向かい合わせに建っていた。そのために付近の小中学生はこの小さな森の土の道を通学路としていた。森の入り口は坂の途中にあって、ただカーブミラーと車が入れないようにアーチ形のガードポールが置いてあった。朝、大人たちが坂を車で上り下りしながら鬱蒼とした森に子供たちが吸い込まれていく様を見ていたかと思うとなんだかおもしろい。

帯広市から引っ越した先はこれまた道東の標津町である。私はこの町の小・中学校を卒業した。つまりおよそ六年住んでいたといえる。この町はオホーツク海に面しており、朝はカモメの声で起こされた。

もちろん川もある。その名の通り標津川である。サケが遡上することで有名で、町にはサーモンパークまである。家の近くだったためにたびたび行ったが、思い出せる魚はイトウ、ニジマス……くらいか。この施設、秋になるとサケの産卵が見ることができる。勇ましい様子であったのは覚えている。また、町の祭り「水・キラリ」の日にはサーモンパークが一際にぎやかになる。町を支える「水」に感謝するために町が伝説を創作して、それをもとに祭りが行われる。

それから標津町にはポー川というのもあった。「ポー川史跡自然公園」というすごい場所があって授業で行ったことがあるがあまりよく覚えていない。結局たいそう素晴らしい資源があっても、関心がないと子供は記憶できないのだろうか。それとも私が不真面目だったから、または私がよそ者だからだろうか。

中学卒業後、私は釧路市の高校に進学した。高校三年間を釧路で過ごした。釧路市は標津町から車で二時間と少しという距離だが少なくとも私の周囲ではさほど珍しい選択肢ではなく、ありがたいことに釧路市には下宿を営む家がほどほどにあった。私は三年間高校の近くにあった下宿と高校の往復をした。下宿と高校は釧路市が誇る「釧路川」と「新釧路川」に挟まれた土地にあった。どちらにも近かった。しかし、どちらが思い出深いかわわれれば新釧路川のほうかもしれない。高校の前に比較的大きな道路があり、途中にある下宿によらずにひたすらまっすぐ北に歩いていくと、鶴見橋という新釧路川を架ける橋がある。欄干のはじまりである親柱が立派なもので、銀色の鶴たちがまさに飛び立とうとしているのだ。この橋の向こうに友人が住んでいたものだから、帰り道に離れがたくてよくこの橋を渡ったものだ。橋の上で寒い寒いと言いながら、ひたすら橋の上から川を見ていた。

一回だけ、川の近くに行ったことがある。高校三年生の冬だった。当時好きだった男の子が「お気に入りの場所」だと言って連れて行ってくれたのだ。何か特別なものがあるわけではないけれど、そこには川があり目の端には海が広がっていて、晴れた日の夕暮にその空間は橙に染まる。深呼吸をすると落ち着けた。きっと地元でも知っている人はさほどいないだろう。道ならぬ道を行った先にあった。もう私にはたどり着けない場所である。

さて、まことに心苦しいが私の「幼少期や青春時代」の川の思い出はこれにて以上となる。見返してみてもわかりにくい思い出ばかりで本当に申し訳なく思う。大学で川の勉強をして初めて自分がとても自然豊かな、美しい川のある街を転々としてきたことに気づいたのだ。おそらく私の川の思い出はこれから作られるのだろう。

(次は斉藤優生さんにバトンを託します)